内村鑑三「代表的日本人」通読による 大衆性低減の持続的効果に関する実験研究

伊地知 恭右 [(1)]（ijichi@decnet.or.jp）
羽鳥 剛史 [(2)]・藤井 聡 [(3)]
〔[(1)] 社団法人北海道開発技術センター・[(2)] 東京工業大学・[(3)] 京都大学〕

An empirical study on effects of reading “Representative men of Japan” by Kanzo Uchimura on reduction of the vulgarity of the masses

Kyosuke Ijichi [(1)], Tsuyoshi Hatori [(2)], Satoshi Fujii [(3)]
[(1)] Hokkaido Development Engineering Center, Japan
[(2)] Graduate School of Science and Engineering, Tokyo Institute of Technology, Japan
[(3)] Graduate School of Engineering, Kyoto University, Japan

Abstract

The authors’ past study focused on the effects of reading classic books such as, “Representative Men of Japan” written by Kanzo Uchimura for reducing one’s vulgar disposition. The experiment study targeting 300 university students suggested that reading the book has an effect of reducing readers’ vulgarity of the masses two weeks later when they have finished reading the book. In this study, a follow-up survey was conducted to explore the continued effects from reading the book of reducing the vulgarity of the masses. The data of the follow-up survey indicated that the continued effects were not verified for “everyone” three months after their reading the book. Further, factors that affect on the degree of the effects of reading the book were investigated. As a result, the book’s effects of reducing readers’ vulgarity of the masses were found to significantly depend on disciplines or environment in their childhood. The survey results also identified that participants who read “Representative Men of Japan” tend more to recommend the book to others. It means reading “Representative Men of Japan” might have relevant effects to prevent massification of human being.

Key words

vulgarity, representative men of Japan, social values, individual orientation, social orientation

1. 問題

我が国の近代化は、大きく産業化と民主化からなるものと言われている（西部，1987）。我が国において、そうした近代化を経て、著しい経済成長や政治的平等、社会福祉の充実が実現されてきたことは周知の事実であろう。その一方で、近代化による急速な社会変化は、それ相応の弊害を内包しているであろうことが危惧される。事実、近代化の流れの中で、物質的豊かさを過度なまでに追及した結果、人々における道徳心や伝統的価値への志向性が低下しつつある可能性が指摘されている（cf. 藤井，2006）。そして、そうした問題が、現在、家族や地域コミュニティの衰退、経済格差の拡大、凶悪犯罪の低年齢化、環境問題の深刻化等、我が国の至る所で様々な形で顕在化しつつあるということが、しばしば指摘されている（cf. 森田・進藤・神原・矢島，2009；丹辺，2006；ジョック・ヤング，2007；リチャード・セネット，1991）。

このような近代化のもたらす弊害については、これまで哲学的論考の中心課題であり続けてきたが（セーレン・キルケゴール，2003；西部，1996）。その中でも、近代に見られる道徳的頽廃の根源に、「大衆人」なる存在のあることが古くより論じられてきた。特に、スペインの哲学者 Ortega（1883 ～ 1955）はその著書「大衆の反逆」（Ortega, 1930）において、近代大衆社会にみられる価値喪失の中に、人間的生の否定や非道徳が胚胎していることを鋭い洞察を持って指摘している。すなわち、Ortega は、産業化と民主化によって牽引される近代社会において、圧倒的に増大した人間的生の可能性を前にしながら、一切の価値を喪失した大衆人が自らの生の決断をなすことができないでいることを看破し、そこに、人間的生の危機として、大衆人の自己の生に対する否定的な屈折した態度を描写するのである。

Ortega の大衆論の特徴は、大衆を数量的な概念あるいは政治的・社会的階級として捉えるのではなく、万人に共通する「心理的事実」として捉えようとしたところにある。Ortega「大衆の反逆」によれば、「大衆とは、善い意味でも悪い意味でも、自分自身に特殊な価値を認めようとはせず、自分は『すべての人』と同じであると感じ、そのことに苦痛を覚えるどころか、他の人々と同一であると感ずることに喜びを見出しているすべての人のことである（Ortega, 1930　神吉訳，1995，p.17）。」

さらに、このような大衆に対置するものとして、Ortega の論ずる「貴族」あるいは「選ばれた人間」とは、「わ

れこそは他に優る者なりと信じ込んでいる僭越な人間ではなく、たとえ自力で達成しえなくても、他の人々以上に自分自身に対して、多くしかも高度な要求を課す人のこと（p.17）」と論じている。すなわち、Ortegaにとっての大衆は現状に満足しきった「平均人（p.15）」（average man）、「凡俗な人間（p.25）」（vulgar）であり、この意味において「選ばれた人間（p.17）」あるいは「高貴な人つまり努力の人（p.92）」とは区別されている。

1.1 大衆性とその社会的影響

前述したように、Ortegaの大衆批判はあくまでも人間に存する心理的類型を問題提起したものである。この点において、Ortegaの論ずる大衆像は時代を超えた1つの普遍的な精神構造を提示したものであり、現代における様々な社会問題を検討する上でも示唆するところが少なくないものと思われる。この認識の下、羽鳥・小松・藤井（2008a）では、以上のOrtegaの定義する心理的事実としての大衆概念に着目し、Ortegaの「大衆の反逆」における大衆の心理的描写に基づいて、個人の大衆性を表す質問項目を作成し、大衆性についての心理尺度を構成している。そして、この先行研究によって、大衆性が、「傲慢性」と「自己閉塞性」という2つの因子から構成されることが示されている。ここに、傲慢性とは「ものの道理や背後関係はさておき、とにかく自分自身には様々な能力が携わっており、自分の望み通りに物事が進むであろうと盲信する傾向」を表している。一方、自己閉塞性とは「自分自身の外部環境からの閉塞性」を表している。さらに、藤井・羽鳥・小松（2007）では、幼少期の生活環境が大衆性の形成に及ぼす影響についても検討されており、幼少期における家庭内のしつけやコミュニケーションが不十分であった場合や、地域との連帯が希薄であった場合、大衆性を構成する2つの因子のうち、特に自己閉塞性が増進する傾向にあることが示されている。

さらに、以上の心理尺度を用いて、個人の大衆性がどのような社会的影響を及ぼすかについて、特に景観問題及び公共事業を巡る合意形成問題を対象として実証的な検討が加えられている。その結果、景観問題に関して、大衆性の高い個人は、良質な風景を軽視し、破壊する傾向にあることが示されている（小松・羽鳥・藤井，2008）。また、合意形成問題に関して、大衆性の高い個人は、行政活動への直接的な関与を強く要求する一方で、政府・行政の公共事業の必要性を認知せず、さらに、行政を信頼しない傾向にあることが示されている。この結果は、人々が大衆化することにより公共事業に対する合意形成が困難となり得ることを示唆するものであると考えられる（羽鳥・小松・藤井，2008b）。

以上の一連の先行研究は、近代化が進展した可能性が危惧される現代社会において、より増長されてきたと考えられる人々の大衆化によって生ずる様々な社会的影響の一側面を浮き彫りにしたものであり、この結果は、大衆化のもたらす近代の弊害が顕在化しつつある可能性を暗示するものと解釈できる。

1.2「良書」通読による大衆性抑制施策の実証実験

以上の先行研究から示唆されているように、人々の大衆性が社会全体に対して様々な否定的影響を及ぼし得るのであれば、人々の大衆性を可能な限り抑制するための手段を模索することが極めて重要なことと考えられる。

そこで、筆者らは先行研究において、大衆性抑制のための具体的方途の一つとして「読書」に着目し、高潔なる人生を描いた書物、所謂「良書」を通読することによって、個人ひとり一人の大衆性が自発的に抑制される可能性について検討した（伊地知・羽鳥・藤井，2010）。この先行研究においては、大衆性の抑制に寄与し得る「良書」の具備すべき条件として、Ortegaが「大衆」と対置するものとして提起した「貴族」と、道徳心の向上に寄与すると考えられている「古典（歴史）」なる要素を考え、そうした「良書」の一つとして、内村鑑三（1861 ～ 1930）による『代表的日本人』（内村鑑三，1995）を選定している。本書は、西郷隆盛、上杉鷹山、二宮尊徳、中江藤樹、日蓮上人の生涯を著述し、彼らに宿る日本古来の道徳や倫理の高潔性を説いた啓蒙の書である[(1)]。そして、内村鑑三「代表的日本人」の通読と人々における大衆性との関連性について、以下のような仮説を措定している。

1.2.1 仮説

内村鑑三「代表的日本人」を通読することによって、人々の大衆性が低減する.

この仮説を検証するため、筆者らは東京工業大学の学生300名を対象とした実験を実施した。その結果、少なくとも通読直後（約2週間）においては、「内村鑑三『代表的日本人』を通読することによって、人々の傲慢性が低減する」という可能性が示され、大衆性を構成する傲慢性について、仮説を支持する結果が得られている。

1.3 本研究の目的

この様に、伊地知ら（2010）において、「代表的日本人」の通読が大衆性の抑制に寄与する方向に働く可能性が示唆されている。ただし、この先行研究では実験直後（約2週間）の短期的な効果を検証するに留まっており、従って、この効果が中長期的に持続しているか否かについては検討されていない。そこで、本研究では、実験後一定期間が経過した時点において、この実験に参加したサンプルを対象とした追加パネル調査を実施し、内村鑑三「代表的日本人」通読の持続的効果を検討することを目的とした。それに加えて、大衆性低減の方途を検討する上での更なる基礎的知見を得るために、通読効果の規定要因を探索的に分析し、どのような要因が「代表的日本人」通読による効果に影響を及ぼしているかについて検討することとした。さらに、本研究では、書籍通読の副次的効果として、「代表的日本人」の波及的効果についても併せて検討することとした。

2. 方法

本研究では、「代表的日本人」通読による持続的効果を

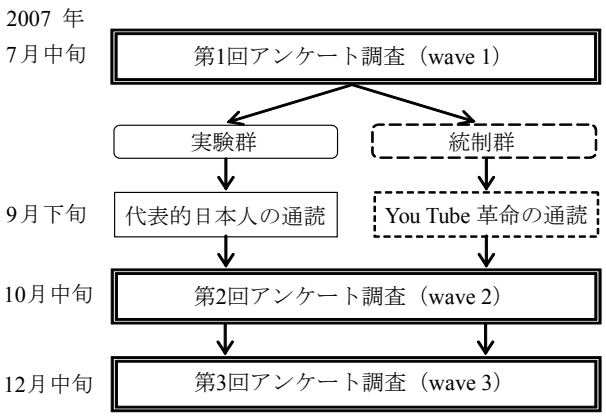

Figure 1: Experimental procedure

検証するため、先行研究（伊地知他，2010）と同一の実験協力者に対して、実験を実施してから、約 3 ヶ月経過した後の 2007 年 12 月に、先行研究と同趣旨のアンケート調査を実施した。実験全体の流れをまとめたものを Figure 1 に示す。

2.1 実験手順

先行研究（伊地知他，2010）においては、実験を実施するにあたり、東京工業大学構内にて実験協力者募集を旨としたチラシを配布し、300 名の協力者を得ている。そして、2007 年 7 月に、実験協力者を東京工業大学構内の一つの会場に集め、wave 1 調査を実施している（なお、wave 2、wave 3 の調査も大学構内の同一の会場にて行った）。その後、実験協力者を無作為に実験群と統制群の 2 つのグループに分類し、実験群に対して内村鑑三著の「代表的日本人」（内村，1995）、統制群に対して神田敏晶著の「You Tube 革命」（神田, 2006）の通読を依頼している [(2)]。そして、上記の書籍通読を依頼した約 2 週間後の 2007 年 10 月に実施した wave 2 について、書籍通読の効果を測定している。

本研究では、さらに一定期間経過後の書籍通読による効果を測定するべく、wave 2 調査への実験協力者 124 名に対して、2007 年 11 月下旬から 12 月上旬にかけて E-mail、電話等を用いて、再調査実施の旨を連絡した。そして、書籍の通読を依頼してから約 3 ヶ月経過した後の 2007 年 12 月に、wave 3 調査を実施したところ、110 名の実験協力者を得ることができた（Table 1）。

Table 1: Participants

度数（人）		男性	女性	合計
	wave1	259	41	300
	wave2	97	27	124
	wave3	84	26	110
年齢（歳）			M	SD
	wave1		20.81	2.18
	wave2		20.60	1.93
	wave3		20.63	2.03

2.2 調査項目

本実験による実験協力者の大衆性の変化を調べるために、wave 1 調査から wave 3 調査を通じて、個人の大衆性指標を量るための質問項目を設定した。また、wave 1 調査では、「代表的日本人」通読効果の規定要因を検討するために、社会的価値、個人志向性・社会志向性、幼少期の生活環境に関する質問項目を設定した。wave 3 調査では、書籍の波及効果を調べるための質問項目を設けた。各質問項目の内容は以下の通りである。

2.2.1 大衆性に関する項目

大衆性指標を量るための質問項目として、先行研究で提案された大衆性尺度を用いた（羽鳥他, 2008a; 伊地知他, 2010）。Table 2 に示すような 2 因子（傲慢性、自己閉塞性）17 項目の質問を設定し、各項目について「とてもそう思う」から「全く思わない」の 7 件法で回答を要請した。ここで、傲慢性は、自分自身や社会等の種々の対象に対する自らの制御能力についての過大な評価に関する質問項目から構成され、一方、自己閉塞性は、外部世界に対する関心および外部世界との紐帯やその中での責務に関する質問項目から構成される。そして、「傲慢性」尺度については対応する 11 項目の加算平均から、「自己閉塞性」尺度については対応する 6 項目のそれぞれを反転した上で求められる加算平均から、それぞれの尺度を構成した．各尺度の α 係数は、「傲慢性」については α = .63、「自己閉塞性」については α = .64 であった。また、両尺度間の相関係数

Table 2: Items of the vulgarity scale

「傲慢性」尺度（α = .63）
自分を拘束するのは自分だけだと思う
自分の意見が誤っている事などない、と思う
私は、どんな時でも勝ち続けるのではないか、と何となく思う
自分個人の「好み」が社会に反映されるべきだと思う
どんなときも自分を信じて、他人の言葉などに耳を貸すべきではない、と思う
「ものの道理」には、あまり興味がない
物事の背景にあることには、あまり興味がない
世の中の問題は、技術ですべて解決できると思う
人は人、自分は自分、だと思う
自分のことを、自分以外のものに委ねることは一切許されないことだと思う
道徳や倫理などというものから自由に生きていたいと思う
「自己閉塞性」尺度（α = .64）
伝統的な事柄に対して敬意・配慮をもっている *
日々の日常生活は感謝すべき対象で満たされている *
世の中は驚きに満ちていると感じる *
我々には、伝統を受け継ぎ、改良を加え、伝承していく義務があると思う *
自分自身への要求が多いほうだ *
自分は進んで義務や困難を負う方だ *

注：α クロンバックの信頼性係数、* 逆転項目

は .157 であった。さらに、大衆性、傲慢性、自己閉塞性のそれぞれについて、その平均点よりも高い個人を「1」、低い個人を「0」とする「高大衆性ダミー」、「高傲慢性ダミー」、「高自己閉塞性ダミー」を設定した。

2.2.2 社会的価値に関する項目

Schwartz（1992）の社会的価値および Strathman et al.（1994）の将来価値を測定するための質問項目を設けた（wave 1 のみ）。これらの心理尺度は、羽鳥ら（2008a）の先行研究において、大衆性尺度と関連性を有することが示された尺度である。前者の社会的価値については、Stern et al.（1999）が用いた 23 項目（Table 3）のそれぞれの重要度を質問することとした。質問の手順は Schwartz（1992）の方法にならい、提示した項目リストの中で自らの価値観に反しているもの（複数可）を -1、最も重要なもの一つを 7 とし、それ以外の価値の重要度を 0 ～ 6 の 7 段階で評定してもらう方法を採用した。後者の将来価値に関しては、Strathman et al.（1994）の指標を採用し、「私は、将来のことをよく考えて、それをもとに日々の行動を決めている」「私はよく、『すぐに結果の出ないような事』でも、実行する」「私は、将来のことを考えて、目先の幸せを犠牲にすることができる」「『将来の問題』は将来、解決されるであろうから、気にする必要はない」「『将来の問題』のために、今を犠牲にする必要はない」「将来のことは、そのときになって考えればよい．今は目先のことが重要である」という 6 項目を設定した。各項目について、「とてもそう思う」から「全く思わない」の 5 件法で回答を要請した。それぞれの尺度の α 係数は、利他価値 α = .79、利己価値 α = .71、変化価値 α = .65、伝統価値 α = .61、将来価値 α = .72 であった。尺度の中にはやや低い α 値も見られるが、一定程度の信頼性が認められた。

Table 3: The scores for the social value (Stern et al., 1999)

利他価値
社会的な正義（不正を正す、弱者の保護）
汚染の防止（天然資源の保全）
公平さ（全ての機会の平等）
自然との調和（自然との適応）
世界平和（戦争と紛争の除去）
地球の尊重（他の生き物との調和）
環境保護（自然保護）
利己価値
社会的な勢力（他者の支配、優位性）
影響力（人々や物事に対する影響力）
富（物質的財産、金銭）
権力（支配や命令の権利）
変化価値
好奇心（あらゆるものに対する興味、探究心）
変化に富んだ生活（挑戦、珍しさと変化）
刺激的な生活（刺激的な経験）
伝統価値
真の友情（親しい理解ある友人）
忠誠心（自分の友人に対する信用）
所属意識（自分の助けとなる友人の存在を感じること）
従順さ（礼儀正しさ、義務を果たすこと）
自己鍛錬（自己抑制、誘惑への忍耐）
家族の安全（愛する人の安全）
両親や年長者の尊重（敬意の表明）
正直さ（純粋、誠実さ）
寛容さ（他者を許そうとする気持ち）

2.2.3 個人志向性・社会志向性に関する項目

伊藤（1993；1995）の作成した心理尺度を用いて、個人志向性と社会志向性を測定するための質問項目を設定した（wave 1 のみ）。ここで、個人志向性とは、「自分独自の基準を尊重し、個性を活かした生き方への志向性」を、社会志向性とは「他者あるいは社会の規範に則った生き方への志向性」を表す（伊藤，1993）。また、P 尺度とはこれらの志向性の肯定的（positive）な側面を捉えたものであり、N 尺度とはその否定的（negative）な側面を捉えたものである（伊藤，1995）。個人志向性において、その P 尺度は自己実現への欲求、N 尺度はエゴの表出や自己愛的性格を表している。また、社会志向性において、その P 尺度は他者あるいは社会規範への志向、N 尺度は他者への一方的な依存や従属といった、未熟な対人関係を表している。これら 4 つの尺度を構成する質問項目を、ランダムに並べ直し、伊藤の方法にならい、各質問項目について「あてはまる」から「あてはまらない」の 5 件法で回答を要請した。それぞれの尺度の α 係数は、個人志向性 P 尺度について α = .66、社会志向性 P 尺度について α = .71、個人志向性 N 尺度について α = .69、社会志向性 N 尺度について α = .72 であり、一定程度の信頼性が認められた。

2.2.4 幼少期の生活環境に関する項目

幼少期の家庭環境や地域環境に関する 20 個の質問項目を設定した（Table 4）。因子分析（主成分分析、バリマックス回転）と信頼性分析の結果、「家庭内コミュニケーション・しつけ」尺度と「地域内コミュニケーション・地域連帯」尺度の 2 つの尺度を構成した [(3)]。各尺度の α 値は、前者が .68、後者が .70 であった。さらに、「家庭内コミュニケーション・しつけ」尺度、「地域内コミュニケーション・地域連帯」尺度のそれぞれについて、その平均点よりも高い個人を「1」、低い個人を「0」とする「高しつけダミー」、「高地域連帯ダミー」を設定した。なお、以上の質問項目の他、「子どものころ、あなたの家族は、何人でしたか？」「兄弟・姉妹は何人いますか？」「祖父・祖母と同居していましたか？」「神棚が家にありましたか？」「仏壇が家にありましたか？」「子どものころ、家に自分の一人部屋がありましたか？」という質問項目、及び、「夕食はどのように食べることが多かったですか？」という質問項目を設けて、それぞれ「はい」「いいえ」の 2 件法、及び「家族全員で

Table 4: “Discipline” and life circumstance in child period

質問項目	回転バリマックス解		
	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ
第 1 因子 「家庭内コミュニケーション・しつけ」（α = .68）			
家庭内で礼儀作法についてしつけられましたか？	**.721**	-.060	-.072
「おはよう」「いただきます」といった家庭内のあいさつをしっかりしていましたか？	**.646**	.025	.091
親にしかられることはよくありましたか？	**.606**	.031	-.083
親子間の会話は多かったと思いますか？	**.494**	.184	.236
家の手伝いをふだんしていましたか？	**.492**	.112	-.125
「節分」「ひな祭り」「端午の節句」などの季節の行事を家庭内でよく行っていましたか？	**.458**	.234	.434
社会の問題が家族の間で話題となることはありましたか？	**.433**	.196	.005
第 2 因子 「地域内コミュニケーション・地域連帯」（α = .70）			
近所の人から、よく注意を受けたりしかられたりしましたか？	.107	**.667**	-.145
近所の子どもと、よく遊びましたか？	-.142	**.636**	.006
近所の人にいつもあいさつをしていましたか？	.261	**.631**	-.069
近所の祭りや盆踊りにいつも参加していましたか？	-.025	**.618**	.212
あなたの家庭は、両隣の家と親交がありましたか？	.114	**.600**	-.165
親戚づきあいは多かったですか？	.301	**.436**	.293
家によく来客がありましたか？	.292	**.379**	.166
第 3 因子（α = .37）			
お墓参りによく行きましたか？	**.342**	**.303**	**.318**
食事のときよくテレビをつけていましたか？	-.183	-.059	**.637**
欲しいと思うものは何でも買ってもらえましたか？	-.157	-.171	**.533**
テレビゲームでよく遊びましたか？	-.383	.063	**.500**
家族での移動はいつも自動車でしたか？	.104	.079	**.334**
学校から帰ったとき、家族の誰かが家にいましたか？	.152	-.028	**.329**
固有値	3.64	1.90	1.65
寄与率	18.22	9.50	8.23
累積寄与率	18.22	27.72	35.95

注：5 回の反復で回転収束

食べる」「全員ではないが家族でそろって食べる」「子どもたちだけで食べる」「ばらばらに食べる」の 4 件法で回答を要請した。

2.2.5 書籍の波及効果及び日常の読書傾向に関する項目

配布した書籍の波及効果について調べるため、wave 3 調査において、「第 2 回アンケート調査にあたってお読みいただいた書籍を、周囲の人に薦めることがありましたか」という質問を設け、「はい」と「いいえ」のいずれかを選択してもらった。

2.3 有効回答者の選定

wave 2 調査時には、実験協力者が依頼した書籍を読了していることを確認するために、以上の質問項目に加えて、実験群、統制群それぞれに対して、配布した書籍の内容に関する 5 つの質問項目を設けた。そして、その回答結果から有効回答者を選定した結果、wave 2 調査の有効回答者は、実験群について 71 人（91 %）、統制群について 41 人（89 %）の計 112 人であった（伊地知他, 2010）。この内、男性は 90 人（80 %）、女性は 22 人（20 %）である。また、wave 3 調査の有効回答者は、実験群について 62 人（90 %）、統制群について 38 人（93 %）の計 100 人であり、その内、男性が 79 人（79 %）、女性が 21 人（21 %）であった。なお、wave 3 調査における有効回答者とは、wave 3 調査の協力者の中で、wave 2 調査時において有効回答者と見なされた実験協力者に相当する。年齢については、wave 2 調査、wave 3 調査共に平均 20.67 歳、標準偏差は 1.96 歳であった。本研究では、以上の有効回答者を分析の対象とすることとした。

3. 結果

wave 1 における各心理尺度の基本統計量を Table 5 に示す。

Table 5: Description of mean, standard deviation, maximum and minimum score of each scales

尺度	n	M	Min	Max	SD
大衆尺度得点	299	3.14	1.59	4.94	0.62
傲慢性尺度	300	3.05	1.36	5.36	0.74
自己閉塞性尺度	299	3.32	1.33	6.00	0.92
利他価値	298	3.28	-0.29	6.14	1.24
利己価値	297	2.26	-1.00	6.25	1.55
変化価値	300	3.76	-0.33	6.33	1.59
伝統価値	299	4.07	0.11	6.11	0.88
将来価値	300	3.29	1.00	5.67	0.75
個人志向性 P 尺度	300	3.37	1.63	5.00	0.64
社会志向性 P 尺度	300	3.80	1.67	4.89	0.57
個人志向性 N 尺度	300	2.93	1.17	5.00	0.73
社会志向性 N 尺度	300	3.27	1.29	4.86	0.72
家庭内コミュニケーション・しつけ	300	5.04	1.43	7.00	0.94
地域内コミュニケーション・地域連帯	300	4.56	1.29	6.86	0.99

注：大衆性尺度、傲慢性尺度、自己閉塞性尺度については、wave1 の調査結果

3.1 大衆性尺度と各心理尺度の関連性の確認

大衆性を構成する傲慢性尺度、自己閉塞性尺度と各心理尺度との相関分析を行った結果を Table 6 に示す。まず、大衆性尺度と社会的価値尺度との間の相関について、傲慢性尺度は、利己価値、変化価値と有意に正の相関を示し、将来価値と有意に負の相関を示した。一方、自己閉塞性尺度は、利他価値、変化価値、伝統価値、将来価値のすべてと有意に負の相関を示した。これらの結果は、羽鳥・小松・藤井（2008a）で得られた結果と同様の相関関係を示している。また、この先行研究において、大衆性尺度と社会的価値尺度との相関関係は Ortega の記述と整合的であり、理論的に解釈可能であることが指摘されている。これらの点を踏まえれば、以上の結果より、本研究の大衆性尺度に一定の妥当性が存在することが本実験からも改めて示唆されたものと考えられる。

次に、幼少期の生活環境に関する尺度については、自己閉塞性尺度との間にのみ有意な相関が見られた。すなわち、自己閉塞性尺度は、「家庭内コミュニケーション・しつけ」と「地域内コミュニケーション・地域連帯」尺度と有意に負の相関を示した。とりわけ、前者との相関係数の水準は他のものよりも大きなものであったことが示された．一方、傲慢性については、幼少期の生活環境

Table 6: Relationship the vulgarity with each scales

	傲慢性		自己閉塞性	
	r	p	r	p
傲慢性	-		.157 **	.006
自己閉塞性	.157 **	.006	-	
利他価値	-.057	.326	-.283 **	.000
利己価値	.274 **	.000	-.005	.931
変化価値	.149 **	.010	-.165 **	.004
伝統価値	-.104	.073	-.306 **	.000
将来価値	-.186 **	.001	-.226 **	.000
個人志向性 P 尺度	.046	.422	-.182 **	.002
社会志向性 P 尺度	-.084	.145	-.355 **	.000
個人志向性 N 尺度	.288 **	.000	-.009	.879
社会志向性 N 尺度	-.123 *	.033	-.029	.620
家庭内コミュニケーション・しつけ	-.084	.147	-.411 **	.000
地域内コミュニケーション・地域連帯	-.096	.097	-.228 **	.000

注：**：1 % 水準で有意（両側）
　　*：5 % 水準で有意（両側）

についての尺度との有意な相関は見られなかった。この結果は、幼少期の家庭内のコミュニケーションやしつけが十分でなく、また、幼少期に地域コミュニティと接触する機会が少ないほど、大衆性の一側面である自己閉塞性が増長される可能性を示唆している。以上の結果についても、藤井・羽鳥・小松（2007）の先行調査から得られている結果と概ね同様のものである。

また、個人志向性尺度に関して、その P 尺度については自己閉塞性尺度と有意に負の相関を示し、N 尺度については傲慢性尺度と有意に正の相関を示した。また、社会志向性尺度に関して、その P 尺度については自己閉塞性尺度と有意に負の相関を示し、N 尺度については傲慢性尺度と有意に負の相関を示した。ここで、個人志向性 P 尺度は自己実現への欲求を表し、また、社会志向性 P 尺度は社会規範への志向を表しており（伊藤，1993）、外部環境からの閉塞性を意味する自己閉塞性が、これら個人志向性 P 尺度、社会志向性 P 尺度の双方と負の相関関係を持つという結果は、理論的に解釈可能であると考えられる。その一方で、個人志向性 N 尺度はエゴの表出を意味するものであることから、この尺度は傲慢性と類似した概念であると考えられる。また、社会志向性 N 尺度は、他者への一方的な依存・従属を表しているが（伊藤，1995）、傲慢性の高い個人は、そうした依存や従属を忌避する傾向にあるものと考えられる。それ故、傲慢性が、個人志向性 N 尺度と正の相関を示し、社会志向性 N 尺度と負の相関を示したことについても、理論的に解釈可能な結果であると考えられる。

以上、本研究の大衆性尺度は、既往の心理尺度と理論的に解釈可能な関連性を持つことが示されたが、これらの結果は、羽鳥・小松・藤井（2008a）と同様に、本研究における大衆性尺度に、一定の経験的な妥当性が存在している可能性が、異なる調査データから改めて示唆されたものと解釈することが可能である。

3.2 書籍通読の持続的効果

全 3 回の調査における、大衆性尺度得点、傲慢性尺度得点、及び自己閉塞性尺度得点について、wave 1（事前 1）と wave 2 時点での平均値と分散を比較した結果を Table 7 及び Figure 2 に示す。また、wave 1（事前 2）と wave 3 時点での平均値と分散を比較した結果を Table 8 及び Figure 3 に示す。なお、wave 1（事前 1）とは、wave 2 実験協力者のみを対象として算出した wave 1 得点であり、wave 1（事前 2）とは、wave 3 実験協力者のみを対象として算出した wave 1 得点である。

Table 7: Change in mean of vulgarity and t-test（wave 1-wave 2）

実験群（n = 71）				
	wave 1（事前 1）	wave 2	変化	変化の t 値と p 値
大衆性	3.07	3.01	-0.05	t = -1.41 p = .162
傲慢性	3.02	2.90	-0.12	t = -2.08 p = .041
自己閉塞性	3.14	3.22	0.07	t = 1.08 p = .283
統制群（n = 41）				
	wave 1（事前 1）	wave 2	変化	変化の t 値と p 値
大衆性	3.16	3.21	0.04	t = 0.68 p = .500
傲慢性	3.00	3.03	0.03	t = 0.45 p = .653
自己閉塞性	3.46	3.53	0.06	t = 0.52 p = .608

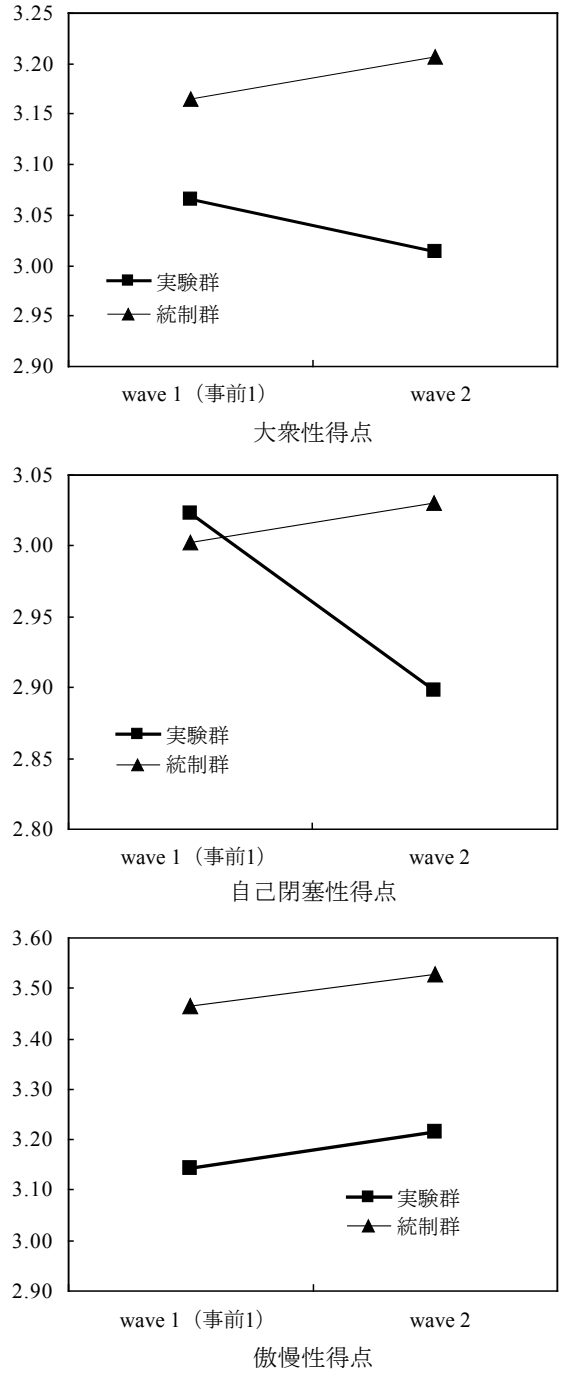

Figure 2: Change in mean of vulgarity（wave 1-wave 2）

書籍通読直後（約 2 週間）の大衆性の変化については、先行研究（伊地知他，2010）において、wave 1（事前 1）と wave 2 の大衆性得点、傲慢性得点、及び自己閉塞性得点のそれぞれの尺度について、2（wave 1 得点 vs. wave 2 得点）× 2（実験群 vs. 統制群）の反復測定分散分析が行われている。その結果、傲慢性尺度について、2 要因の交

Table 8: Change in mean of vulgarity and t-test（wave 1-wave 3）

実験群（n = 62）				
	wave 1（事前2）	wave 3	変化	変化の t 値と p 値
大衆性	3.06	2.99	-0.08	t = -1.51 p = .137
傲慢性	3.01	2.89	-0.13	t = 1.80 p = .077
自己閉塞性	3.15	3.17	0.02	t = 0.23 p = .822
統制群（n = 38）				
	wave 1（事前2）	wave 3	変化	変化の t 値と p 値
大衆性	3.17	3.01	-0.15	t = -1.93 p = .061
傲慢性	2.98	2.82	-0.16	t = -1.78 p = .083
自己閉塞性	3.51	3.37	-0.14	t = -1.17 p = .251

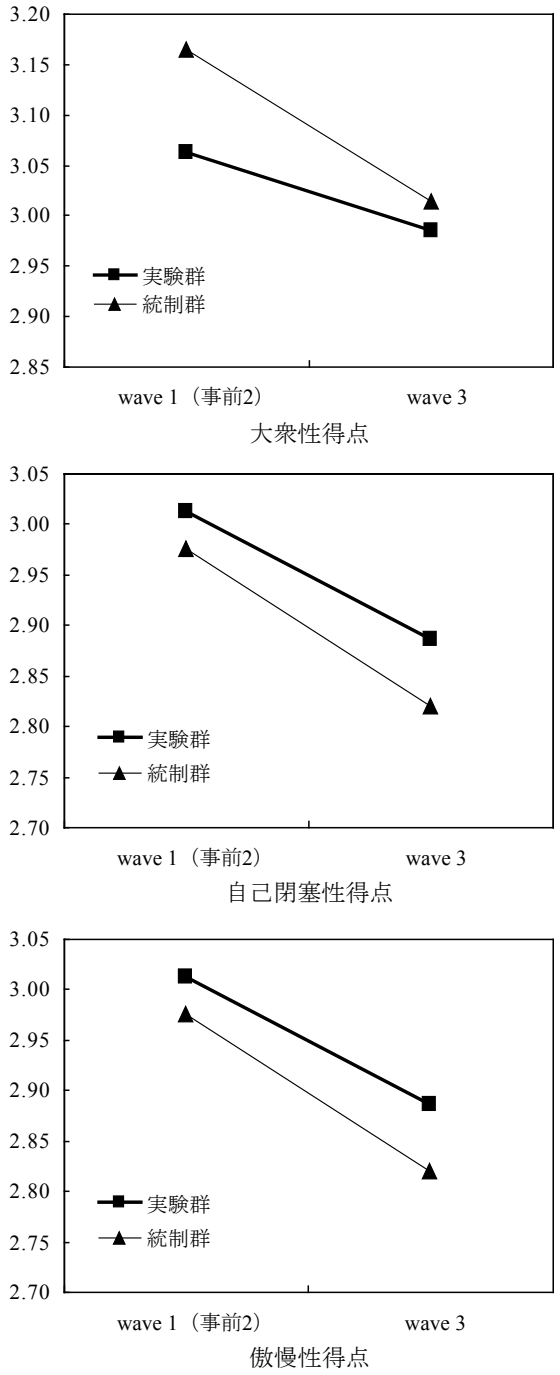

Figure 3: Change in mean of vulgarity（wave 1-wave 3）

互作用が有意となり（F (1, 218) = 2.81, p = .097）、「代表的日本人」を読んだ実験協力者において、『You Tube 革命』を読んだ実験協力者よりも、一般にその傲慢性が抑制されるという傾向が示されている。

さて、本研究の検討課題である書籍通読から一定期間（約 3 ヶ月）経過後の、実験群と統制群の大衆性の変化を比較検証するために、先行研究と同様の分析を、wave 1（事前 2）と wave 3 に対しても行った。まず、大衆性尺度については、wave 1/wave 3 の主効果（F (1, 9) = 6.51, p = .012）は有意であったが、両要因の交互作用（F (1, 98) = 0.69, p = .408）は有意ではなかった。傲慢性尺度についても同様に、wave 1/wave 3 の主効果（F (1, 98) = 6.26, p = .014）は有意であったが、両要因の交互作用（F (1, 98) = 0.07, p = .797）は有意ではなかった。自己閉塞性尺度については、wave 1/wave 2 の主効果（F (1, 98) = 0.95, p = .333）、両要因の交互作用（F (1, 98) = 1.47, p = .228）ともに有意ではなかった。すなわち、書籍通読後約 3 ヶ月においては、大衆性の変化について実験群・統制群との間に有意な差は確認されなかった。

3.3 書籍通読効果の規定要因

次に、「代表的日本人」通読による効果がどのような条件に依存しているかについて検証するため、本研究で採用した各心理尺度を用いて探索的な分析を行った。まず、統制群・実験群のそれぞれについて、wave 2、wave 3 時点において測定した、大衆性、傲慢性、及び自己閉塞性尺度の wave1 に比した“変化量”を従属変数に、各心理尺度を説明変数にとった単回帰分析を行い、その上で、両群の係数の間に有意な差が見られる要因を検出した。ここで、幼少期の生活環境に関する心理尺度については、より詳細に検証するため、「家庭内コミュニケーション・しつけ」尺度、「地域内コミュニケーション・地域連帯」尺度に加えて、各尺度を構成する個々の質問項目も説明変数として用いた。

3.3.1 wave 2 時点での効果規定要因

以上の前提で行った wave 2 時点での分析結果について、有意な係数が得られたものを Table 9 に示す。なお、表中の「child 15」などの記号は、幼少期の生活環境に関する質問項目について、分析の際に便宜的に付与した記号である。

まず、書籍通読による大衆性の変化について、幼少期の生活環境に関する質問項目「child 8」、「child 14」、「child 23」、及び「個人志向性 N 尺度」の項目において、実験群と統制群の間で統計的に有意な差が見られた。この結果は、幼少期の生活環境について、実験群における回帰係数が負であるのに対して、統制群における回帰係数が正であることから、子どものころ「一人部屋があった」人、「欲しいものを買ってもらっていた」人、もしくは「社会問題が家族の間で話題になっていた」人において、「代表的日本人」を読む方が、「You Tube 革命」を読むことに比べて、少なくともその通読から約 2 週間の間は、その大

Table 9: Simple liner regression analysis for difference of vulgarity scale（wave 1-wave 2）

説明変数	従属変数：大衆性の変化				従属変数：傲慢性の変化				従属変数：自己閉塞性の変化			
	B		t 検定		B		t 検定		B		t 検定	
	実験群	統制群	t 値	p 値	実験群	統制群	t 値	p 値	実験群	統制群	t 値	p 値
高自己閉塞性ダミー	-0.12	-0.31	1.28	.20	-0.04	-0.09	0.27	.79	**-0.28**	**-0.71**	**1.74**	**.09 ***
個人志向性 N 尺度	**-0.06**	**0.19**	**2.28**	**.02 ****	**-0.06**	**0.20**	**1.96**	**.05 ****	-0.04	0.17	1.06	.29
社会志向性 N 尺度	0.16	0.22	0.70	.49	0.23	0.13	0.87	.38	**0.02**	**0.41**	**2.19**	**.03 ****
子どものころ、神棚が家にありましたか？（child 5）	0.05	0.10	0.29	.77	0.20	0.01	0.88	.38	**-0.24**	**0.27**	**1.73**	**.09 ***
子どものころ、家に自分の一人部屋がありましたか？（child 8）	**-0.17**	**0.10**	**1.73**	**.09 ***	**-0.22**	**0.27**	**2.55**	**.01 ****	-0.10	-0.22	0.44	.66
子どものころ、欲しいと思うものは何でも買ってもらえましたか？（child 14）	**-0.05**	**0.04**	**1.86**	**.07 ***	**-0.09**	**0.02**	**1.75**	**.08 ***	0.01	0.09	0.84	.40
子どものころ、食事のときよくテレビをつけていましたか？（child 15）	0.02	-0.03	1.41	.16	0.02	0.00	0.37	.71	**0.02**	**-0.10**	**1.69**	**.09 ***
子どものころ、親子間の会話は多かったと思いますか？（child 22）	-0.06	0.01	1.01	.31	**-0.12**	**0.07**	**2.21**	**.03 ****	0.05	-0.10	1.38	.17
子どものころ、社会の問題が家族の間で話題となることはありましたか？（child 23）	**-0.01**	**0.08**	**2.14**	**.03 ****	**-0.06**	**0.06**	**2.21**	**.03 ****	0.06	0.10	0.56	.58

注：** 5 % 水準で有意（両側）　* 10 % 水準で有意（両側）

衆性が抑制される傾向が高いことを示している。また、「個人志向性 N 尺度得点が高い」人ほど、「代表的日本人」を読む方が、「You Tube 革命」を読むことに比べて、本調査期間において、その大衆性が抑制される傾向が見られた。

次に、書籍通読による傲慢性の変化について、幼少期の生活環境に関する質問項目「child 8」、「child 14」、「child 22」、「child 23」、及び、「個人志向性 N 度」の項目において、実験群と統制群の間で統計的に有意な差が見られた。この結果は、前段と同様に、幼少期の生活環境について、子どものころ「一人部屋があった」人、「欲しいものを買ってもらっていた」人、「親子間の会話が多かった」人、「社会問題が家族の間で話題になっていた」人において、「代表的日本人」を読む方が、「You Tube 革命」を読むことに比べて、少なくともその通読から約 2 週間の間は、その傲慢性が抑制される傾向が高いことを示している。また、「個人志向性 N 尺度得点が高い」人ほど、「代表的日本人」を読む方が、「You Tube 革命」を読むことに比べて、本調査期間において、その傲慢性が抑制される傾向が見られた。

最後に、書籍通読による自己閉塞性の変化について、幼少期の生活環境に関する質問項目「child 5」、「child 15」、及び、「社会志向性 N 尺度」、「高自己閉塞性ダミー」の項目において、実験群と統制群の間で統計的な有意差が見られた。この結果は、幼少期の生活環境については、子どものころ「神棚が家にあった」人、「食事のときよくテレビをつけていなかった」人において、「代表的日本人」を読む方が、「You Tube 革命」を読むことに比べて、少なくともその通読から約 2 週間の間は、その自己閉塞性が抑制される傾向が高いことを示している [(4)]。また、「社会志向性 N 尺度得点が高い」人ほど、「代表的日本人」を読む方が、「You Tube 革命」を読むことに比べて、本調査期間において、その自己閉塞性が抑制される傾向が見られた [(5)]。さらに、「高自己閉塞性ダミー」については、実験群、統制群ともにその回帰係数が負であり、かつ統制群の方が係数の絶対値が大きいことから、自己閉塞性の高い人ほど、「代表的日本人」を読む方が、「You Tube 革命」を読むことに比べて、少なくともその通読から約 2 週間においては、その自己閉塞性の抑制効果が小さい可能性を示している。このことは少なくとも、「代表的日本人」は自己閉塞性の高い人には理解され難いという可能性を示唆するものである。なお、先行研究（伊地知・羽鳥・藤井, 印刷中）において仮説を演繹する際に論じているように、自己閉塞性が高い個人においては、高徳な人物の物語に触れても、彼の自己閉塞性故に、その物語を受け入れる傾向が少なく、それ故、「代表的日本人」通読の効果が低下するであろうことが予想されるのであり、この結果は、その議論に経験的妥当性が存在する可能性を示すものである。

3.3.2 wave 3 時点での効果規定要因

wave 3 時点での分析結果について、有意な係数が得られたものを Table 10 に示す。この表に示すように、大衆性の変化について、幼少期の生活環境に関する質問項目「家庭内コミュニケーション・しつけ」、「child 11」、「child 17」、「child 22」、「child 23」、及び、「個人志向性 N 尺度」の項目において、実験群と統制群の間で統計的に有意な差が見られた。この結果は、幼少期の生活環境について、子どものころ「家庭内コミュニケーションが豊富で、しつけがきちんとなされていた」人、「家庭内のあいさつをしっかりしていた」人、「季節の行事を家庭内でよく行っていた」人、「親子間の会話が多かった」人、もしくは「社会の問題が家族の間で話題となることが多かった」人

Table 10: Simple liner regression analysis for difference of vulgarity scale（wave 1-wave 3）

説明変数	従属変数：大衆性の変化				従属変数：傲慢性の変化				従属変数：自己閉塞性の変化			
	B		t 検定		B		t 検定		B		t 検定	
	実験群	統制群	t 値	p 値	実験群	統制群	t 値	p 値	実験群	統制群	t 値	p 値
個人志向性 N 尺度	**-0.03**	**.23**	**1.91**	**.06** *	-0.04	0.14	1.09	.28	**0.01**	**0.40**	**1.93**	**.06** *
家庭内コミュニケーション・しつけ	**-0.06**	**.13**	**1.82**	**.07** *	-0.04	0.08	0.94	.35	**-0.08**	**0.21**	**2.01**	**.05** **
子どものころ、家に自分の一人部屋がありましたか？（child 8）	-0.12	0.10	1.23	.22	**-0.15**	**0.31**	**2.05**	**.04** **	-0.07	-0.29	0.80	.43
子どものころ、家の手伝いをふだんしていましたか？（child 10）	0.00	0.07	1.30	.20	0.03	0.04	0.16	.87	**-0.05**	**0.13**	**2.30**	**.02** **
子どものころ、「おはよう」「いただきます」といった家庭内のあいさつをしっかりしていましたか？（child 11）	**-0.11**	**0.00**	**2.03**	**.04** *	-0.14	-0.04	1.38	.17	**-0.06**	**0.08**	**1.68**	**.10** *
子どものころ、食事のときよくテレビをつけていましたか？（child 15）	-0.01	-0.04	0.66	0.51	-0.05	-0.02	0.38	.71	**0.06**	**-0.06**	**1.84**	**.07** *
子どものころ、「節分」「ひな祭り」「端午の節句」などの季節の行事を家庭内でよく行っていましたか？（child 17）	**0.02**	**0.10**	**1.89**	**.06** *	0.03	0.12	1.56	.12	-0.01	0.07	1.16	.25
子どものころ、家族での移動はいつも自動車でしたか？（child 21）	-0.02	-0.05	0.61	.55	-0.04	-0.01	0.57	.57	**0.01**	**-0.12**	**2.09**	**.04** **
子どものころ、親子間の会話は多かったと思いますか？（child 22）	**-0.09**	**0.06**	**2.06**	**.04** **	**-0.14**	**0.09**	**2.42**	**.02** **	0.00	0.01	0.13	.90
子どものころ、社会の問題が家族の間で話題となることはありましたか？（child 23）	**0.00**	**0.09**	**1.78**	**.08** *	-0.01	0.02	0.50	.62	**0.01**	**0.20**	**2.75**	**.01** **

注：** 5 % 水準で有意（両側）　* 10 % 水準で有意（両側）

において、「代表的日本人」を読む方が、「You Tube 革命」を読むことに比べて、少なくともその通読から約 3 ヶ月時点において、その大衆性が抑制される傾向が高いことを示している。また、その他の尺度についても同様に、「個人志向性 N 尺度得点が高い」人ほど、「代表的日本人」を読む方が、「You Tube 革命」を読むことに比べて、本調査期間において、その大衆性が抑制される傾向が見られた。

次に、書籍通読による傲慢性の変化について、幼少期の生活環境に関する質問項目「child 8」、「child 22」の項目において、実験群と統制群の間で統計的な有意差が見られた。この結果は、幼少期の生活環境について、子どものころ「自分の一人部屋があった」人、「親子間の会話が多かった」人において、「代表的日本人」を読む方が、「You Tube 革命」を読むことに比べて、少なくともその通読から約 3 ヶ月の間は、その大衆性が抑制される傾向が高いことを示している。

最後に、書籍通読による自己閉塞性の変化については、幼少期の生活環境に関する質問項目「家庭内コミュニケーション・しつけ」、「child 10」、「child 11」、「child 15」、「child 21」、「child 23」、及び、「個人志向性 N 尺度」の項目において、実験群と統制群の間で統計的に有意な差が見られた。この結果は、幼少期の生活環境について、子どものころ「家庭内コミュニケーションが豊富で、しつけがきちんとなされていた」人、「学校から帰ってきたとき家族がいた」人、「家庭内のあいさつをしっかりしていた」人、「食事のときにテレビをつけていなかった」人、「家族での移動が自動車でなかった」人、「社会問題が家族で話題になった」人において、「代表的日本人」を読む方が、「You Tube 革命」を読むことに比べて、少なくともその通読から約 3 ヶ月の間は、その大衆性が抑制される傾向が高いことを示している。また、「個人志向性 N 尺度得点が高い」人ほど、「代表的日本人」を読む方が、「You Tube 革命」を読むことに比べて、本調査期間において、その自己閉塞性が抑制される傾向が見られた。

3.4 書籍通読効果の波及的影響

wave 3 調査において質問した、書籍の波及的影響に関して、実験群において 17 人（27 %）、統制群において 5 人（13 %）の実験協力者が、自分の読んだ書籍を周囲の人々に薦めていたことが分かった。その回答と群とのクロス集計表を作成し、χ^2 検定を行ったところ、群間で傾向差があるという結果が得られた（$\chi^2 = 2.79$, $p = .094$）。この結果は、「代表的日本人」の方が、「You Tube 革命」に比べて、他の人々に波及する可能性が高いことを示唆する結果であると考えられる。

4. 考察

4.1「代表的日本人」通読による持続的効果の検証

前述した通り、先行研究（伊地知他，2010）では、書籍通読直後（約 2 週間後）において、大衆性を構成する 2 つの尺度のうち、傲慢性において、「代表的日本人」通読効果に関する仮説を支持する結果が得られていた。ここで、Ortega の論ずる大衆性が「傲慢性と自己閉塞性を併せ持つ存在」として描出されており、この想定が、両尺

度の相関が有意に正であるという実験データによっても、経験的に裏付けられていることを踏まえれば、「代表的日本人」を通読した人において、大衆性を構成する傲慢性が抑制されるという先行研究の結果は、本書籍の通読が、部分的なものであれ、大衆性の抑制に寄与する方向に働く可能性を示唆するものと解釈することができる。

ただし、本研究より、その通読から一定期間（約 3 ヶ月）経過後においては、本仮説を支持する統計的に有意な結果が得られず、「代表的日本人」通読による効果を確認することが出来なかった。この結果から、「代表的日本人」の通読は、傲慢性の抑制に対して短期的な効果を及ぼし得るものの、少なくとも「万人」に対しては、読了後の時間の経過に伴い、その効果が安定的に持続し難い可能性が存在するものと考えられる。

4.2 幼少期の生活環境が「代表的日本人」通読効果に及ぼす影響

この様に、「代表的日本人」通読による大衆性低減の効果は、少なくとも「万人」において、安定的に持続するものではないという可能性が示されたものの、特定の条件を持つ個人については、その効果が持続する可能性が考えられる。そこで、この可能性について検討したところ、wave 2、wave 3 における大衆性、傲慢性、及び自己閉塞性の全ての変化に対し、幼少期の生活環境に関する要因について、統計的に有意な結果が得られた。特に、書籍通読から一定期間（約 3 ヶ月）経過後に測定した効果に対して、幼少期の生活環境が顕著な影響を及ぼすという結果が得られた。この結果は、幼少期に、基本的なしつけをしっかりと受けていた人や、家庭内のコミュニケーションや地域内の交流が活発であった人ほど、「代表的日本人」の通読によって、大衆性およびそれを構成する傲慢性と自己閉塞性が抑制され、かつ、その抑制効果の持続性が高い傾向にあることを表している [(6)]。その反対に、幼少期に、家庭内のしつけや地域連帯が不足していた人においては、一般に「代表的日本人」を通読することによって、その大衆性が抑制される傾向が低いことを示している。

4.3 良書波及による大衆性抑制の可能性

本実験では、「You Tube 革命」に比べて、「代表的日本人」の方が、人々に波及しやすい傾向にあることが示された。冒頭で述べたように、先行研究（伊地知他，2010）において「代表的日本人」を「良書」として選定する際には、本書が高徳なる精神性を含んでいるものと想定していた。したがって、本研究で得られた結果は、以下のような可能性を暗示するものと言えよう：「良書」に含まれた高徳なる精神性は、その良書の紹介を通じて、人々の間で自発的に波及（伝染）していく。この解釈に一定の妥当性があるとするならば、「代表的日本人」をはじめとする高い精神性を秘めた「良書」なるものは、その内容故に、人々の手によって、地域を越えて、また、時代を通じて“自発的に”広がっていくものと考えられる。つまり、「良書」とそこに秘められた高徳なる精神性は、空間的にも時間的にも伝播するのであり、その時間的広がりによって、いずれ、一般に言うところの「古典」になる可能性が考えられる [(7)]。

本研究より、一般に、一個人においては「代表的日本人」通読による効果が安定的に持続し難い可能性が示され、一個人における一冊の「良書」通読による効果に限界が存在する可能性が示唆されたものの、この「良書」波及による 2 次的な効果の可能性を加味するならば、大衆性抑制に向けた方策の一つとして、良書通読という方途には、一定の有用性があると考えられる。

なお、本研究が大学生のみを対象としていることから、今後は、そうした方策の効果について、より一般的な知見を得るために、幅広い年齢層を対象とした調査実験を進めていくことが重要である。ただし、先行研究（伊地知他，2010）で措定した理論仮説が真でないとすれば、仮に大学生サンプルであったとしても、そして、良書の一つであるところの『代表的日本人』を活用した実験であったとしても、その仮説を支持“しない”データが得られ、また、一部の対象者における持続的効果や波及効果も確認“できない”であろうことが予想されるところである．それ故、本実験データを用いた仮説検証とその追加分析にも、一定の経験的妥当性が存在するものと思われる．ただし、繰り返しとなるが、本研究における効果計測やその規定要因の抽出をより厳密なものとするためには、今後より広範なサンプルや異なる実験条件を用いた仮説検証と追加分析が必要となることは言うまでもない。その意味において、本研究は、そうした研究の第一歩と位置づけられるであろう。

注

(1) 本書では、5 人の「代表的日本人」がその人生において経験した「困難」や「義務」、あるいは彼らの有する「義」や「徳」について述べられており、すくなくとも内村の目に映じた彼ら「代表的日本人」は、オルテガの論ずる「貴族」なる存在、すなわち「自らに多くを求め、進んで困難と義務を負わんとする」者に相違ないのではないかと思われる。加えて、その歴史（伝記）的著述の内容により、「古典（歴史）」という要素は当然担保されるものと考えられる。つまり、大衆性の抑制に寄与すると考えられる「良書」の条件が、「貴族性」と「古典」という要素の具備であると考えるならば、本書『代表的日本人』はこれらの条件を満たす一つの「良書」と考えられる。

(2) ここでは、「代表的日本人」通読による効果をより明確に検証するために、統制群に対して、その価値観や人格に出来るだけ影響を及ぼさないような書籍を読んでもらうことを考え、「You Tube 革命」を選定することとした。本書は、You Tube の性能やサイトを中心に諸現象を解説しており、You Tube やインターネット、メディアに対する認識については、読者に影響を与え得るが、本研究で対象とするような、個人の性格や価

値観に対しては、大きな影響は及ぼさないと考えられる。

(3) 固有値の減衰を基に、3 因子解が妥当であると判断し、各因子について、その因子に対して 0.3 以上の因子負荷量を有する項目の加算平均からそれぞれの尺度を構成した。ただし、第 3 因子の α 値が小さいため、この因子に属する質問項目については、個別の尺度として用いることとした。また、「お墓参りによく行きましたか？」については、どの因子に対しても高い負荷量を有していたため、個別の尺度として扱うこととした。

(4) 「子どものころ、食事のときによくテレビをつけていましたか?」の項目については、回帰係数の正負を逆転し、その解釈を逆に与えることで、このように記述できる。

(5) 「社会志向性 N 尺度」では、両群とも係数が正であるが、統制群に比べて実験群の方が有意に小さいため、このように解釈することが出来る（以下の考察についても、同様）。

(6) ただし、子どものころ「自分の一人部屋があった」については、家庭内のコミュニケーションを抑制するように働く可能性が考えられるが、本実験から、良書通読による大衆性抑制効果に寄与するという結果が得られた．この点については、今後の課題としたい。

(7) 冒頭において、「良書」の具有すべき条件として、「古典」なる要素を提起したが、以上の考察から、「良書」であるからこそ、その波及によって「古典」という要素を持ちえたとも考えることができる。

引用文献

藤井聡（2006）．風景の近代化とニヒリズム―宗教性なきデザインの破壊的帰結について― 景観・デザイン研究論文集，1，67-78.

藤井聡・羽鳥剛史・小松佳弘（2007）．オルテガ「大衆の反逆」論についての実証的研究．日本社会心理学会第 48 回大会論文集，120-121.

羽鳥剛史・小松佳弘・藤井聡（2008a）．大衆性尺度の構成―“大衆の反逆”に基づく大衆の心的構造分析―．心理学研究，79 (5).

羽鳥剛史・小松佳弘・藤井聡（2008b）．政府に対する大衆の反逆―公共事業合意形成に及ぼす大衆性の否定的影響についての実証的研究―．計画学研究論文集，25，37-48.

伊地知恭右・羽鳥剛史・藤井聡（2010）．内村鑑三『代表的日本人』の通読による大衆性低減効果に関する報告 土木学会論文集 D，66 (1)，40-45.

伊藤美奈子（1993）．個人志向性・社会志向性尺度の作成及び信頼性・妥当性の検討．心理学研究，64，115-122.

伊藤美奈子（1995）．個人志向性・社会志向性 PN 尺度の作成とその検討．臨床心理学研究，13，39-47.

ジョック・ヤング・青木秀男・伊藤泰郎・岸政彦・村澤真保呂（訳）（2007）．排除型社会―後期近代における犯罪・雇用・差異―．洛北出版.

神田敏晶（2006）．You Tube 革命―テレビ業界を震撼させる「動画共有」ビジネスのゆくえ―．ソフトバンク新書.

小松佳弘・羽鳥剛史・藤井聡（2008）．景観保全に及ぼす大衆性の破壊的影響に関する実証的研究―オルテガ「大衆の反逆」の景観問題への示唆（2）―．土木計画学研究・講演集，37.

森田洋司・進藤雄三・神原文子・矢島正見（2009）．シリーズ社会問題研究の最前線Ⅱ．新たなる排除にどう立ち向かうか―ソーシャル・インクルージョンの可能性と課題―．学文社.

Ortega, J. (1930). *The revolt of the masses*. New York, W. W. Norton & Company.

（La Rebelion de las Masas. (1930). O. C. IV. オルテガ・イ・ガセット，J．神吉敬三（訳）（1995）．大衆の反逆．ちくま学芸文庫）

西部邁（1987）．大衆の病理―袋小路にたちすくむ戦後日本―．NHK ブックス.

西部邁（1996）．思想の英雄たち―保守の源流をたずねて―．文藝春秋.

リチャード・セネット・北山克彦・高階悟（訳）（1991）．公共性の喪失．晶文社.

Schwarz, S. H. (1992). Universals in the content and structure of values: Theoretical advances and empirical tests in 20 countries. *Advances in Experimental Social Psychology*, 25, 1-65.

セーレン・キルケゴール 1846 現代の批評.

（キルケゴール．桝田啓三郎（訳）2003 死に至る病・現代の批評　中央公論新社.）

Stern, P. C., Dietz, T., Abel, T., Guangnano,G. A. & Kalof, L. (1999). A value-belief-norm theory of support for social movement: The case of environmentalism. *Human Ecology Review*, 6, 81-97.

Strathman, A., Gleicher, F., Boninger, D. S., & Edwards, C. S. (1994). The consideration of future consequences: Weighing immediate and distant outcomes of behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, 66, 742-752.

丹辺宣彦（2006）．社会階層と集団形成の変容―集合行為と「物象化」のメカニズム―．東信堂.

内村鑑三（鈴木範久訳）（1995）．代表的日本人．岩波文庫.

（受稿：2010 年 7 月 23 日　受理：2010 年 11 月 30 日）